

品川台場(国史跡, 続百名城)(東京都港区台場一丁目)(台場公園)

お台場（おだいば）は、東京港埋立第 13 号地に属する東京都港区台場、品川区東八潮、江東区青海のうち青海南ふ頭公園以北から成るエリアである。

歴史・沿革

江戸時代

1853 年（嘉永 6 年）、ペリー艦隊が来航して幕府に開国要求を迫る。これに脅威を感じた幕府は、江戸の直接防衛のために海防の建議書を提出した伊豆菰山代官の江川英龍に命じて、洋式の海上砲台を建設させた。品川沖に 11 基ないし 12 基の台場を一定の間隔で築造する計画であった。工事は急ピッチで進められ、およそ 8 か月の工期で 1854 年にペリーが 2 度目の来航をするまでに砲台の一部は完成し、品川台場（品海砲台）と呼ばれた。お台場という呼び方は、幕府に敬意を払って台場に「御」をつけ、御台場と称したことが由来である。埋め立てに用いる土は高輪の八ツ山や御殿山を切り崩して調達した。また、そのために東海道の高輪通りを昼間は通行止めにした^[4]。

ペリー艦隊は品川沖まで来たが、この砲台のおかげで横浜まで引き返し、そこでペリーが上陸することになった。台場は石垣で囲まれた正方形や五角形の洋式砲台で、まず海上に第一台場から第三台場が完成、その後に第五台場と第六台場が完成した。第七台場は未完成、第八台場以降は未着手で終わった^[1]。第四台場は 7 割ほど完成していたが工事は一旦中断され、7 年後に工事が再開されて完成した。第四台場は後日、造船所の敷地とった。また第四台場の代わりに品川の御殿山のふもとに御殿山下台場が建設され、結局、合計 8 つの台場が建設された。¹現在は台場公園として開放されている第三台場と、他の埠頭などつながっていない第六台場が残されている。

完成した台場の防衛は江戸湾の海防を担当していた譜代大名の川越藩（第一台場）、会津藩（第二台場）、忍藩（第三台場）の 3 藩が担った。

この砲台は十字砲火に対応しており、敵船を正面から砲撃するだけでなく、側面からも攻撃を加えることで敵船の損傷を激しくすることを狙ったものである。2 度目の黒船来襲に対し、幕府はこの品川台場建設を急がせ、佐賀藩で作らせた洋式砲を据えたが、結局この砲台は一度も火を噴くことなく開国することとなった。

明治時代

- 1875 年（明治 8 年）：海上の 7 つの台場が陸軍省の所管となる。明治中期には東京湾要塞の建設が始まったこともあって台場の重要性が減り、以後徐々に払い下げられることとなる。
- 1878 年（明治 11 年）：芝区の成立に伴い、海上の 7 つの台場（第一 - 第七台場）は芝区に所属し、それぞれ東京府芝区大字品川沖 1 - 7 番地となる。大正の初めまでに町名の品川沖は品海砲台に変更となる（詳しい時期は不明）。
- Wikipedia による



